



里見八犬傳
拾四編
卷卅下



13
709
80



門 遠 13
 號 709
 卷 80



明治三六年
 十月九日
 購

第百五十四回 定正將を連て水陸大軍を起す

姑且して義成主の又大士を向ひて親兵衛の事のも各一極の意
 見ありて再議を寛く去死之我又別思ふあり。是も素藤伏誅の
 後封内安んじ似れども治居る乱を忘れざる。古今良將の小心なり。
 知今戦國の時小當り。一日も燕居を去らざる。安房上總下總は他
 州小勝りて稻穀の熟早けれ。十月より正月まで農夫們皆耕稼暇
 あり。教を以て戦ひは是と垂れんと云。經文あると等閑なり。よく思ひ
 後悔せん。既に初冬小幾日あり。宜く民水陸の閉戦を習せべし。
 この美上總の諸城主へ徇示して促し。當國の汝等七名七隊小備
 令民を教へ。然れども隣國は憚りあれ。陸を獸獵をせよ。水を

漁捕も假托も。その美を約ふ元者也諸事の異日沙汰あらん先よく
その意を約よかり。と示しぬ信乃道節毛野莊介大角現八小文吾も
皆共侶小京も。臣も富國も召とせられしものも。もるも。素
可惜光陰の過ぬぬと。本意も思ひひり。信乃を兼あるを。素
より願ふ所なり。但し惣大将出まされ。諸民始より信服せむ足の如
く使ふ元進退軌る。信乃も。その美の什麼と問るを。義実主うち。其
美も安房殿主張あり。其習陣の都督大郎義通あり。他の童
年十一歳尚成人の至る。今より諸彦と師と學ぶ。後の裨益ある
る多けい。宜く教てよ。と負しぬ。大士等の阿と。願と。額と。徳と。その美の
臣もいふ。及ぶ。元進退軌る。信乃も。その美の什麼と問るを。義実主うち。其
力を盡して仕せんと。異口同様る言美も。義成主も。餘談も。及

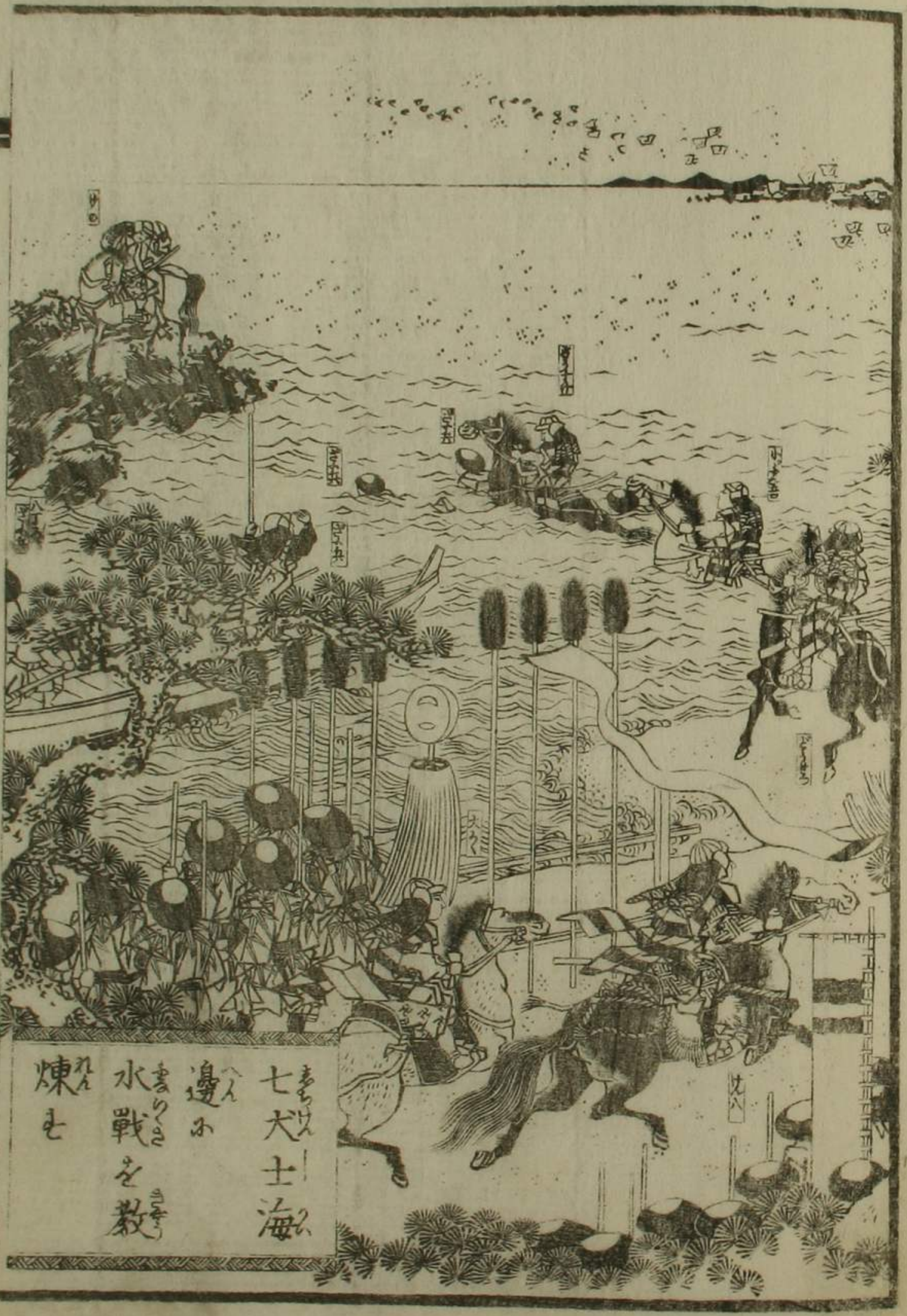
比のひけ。語次も道節が。既知せぬ。扇谷定正主も臣も。故
主の冤家。今茲の春正月廿一日。義兄弟の資助も。聊怨も復
す。折信乃が五十子の城を抜ける奇功あり。其後又料も。大江親兵衛が
俱し。云那河鯉佐太郎の政木大全孝嗣の事も。いへ。定正主羞怨
も。臣も。住方と。情と。地と。索るも。いへ。開を。怕るも。いへ。このも。這杖桑の
二國。是東南の一隅也。隣國の虚実を。撈り易く。を。いへ。間諜見も。増て
毎那地。在。必便宜。いへ。小文五。亦。下總市河の舟
長。大江屋依。と。喚。做。杜。伎。親。兵。衛。が。親。山。林。房。八。の。迹。成。継
る。今も。猶。那。里。在。開。が。妻。水。渡。の。妙。真。の。姪。也。夫。婦。共。其。本。性
老。實。見。で。い。は。累。他。が。訪。来。折。件。の。一。美。も。真。示。也。敵。地。の。拘。忌
元。他。の。河。船。を。乘。走。り。武。藏。下。總。下。野。也。造。り。ぬ。処。る。者。不

八代傳九輯卷三十一
十四
○文溪堂藏

いへ敵の秘密を知らず知る不便宜間謀見小勝り。謀り易くやひむと告
む。義成主うち多き。開の亦定不便宜のめん我も亦那管領の境を犯す
あわらん歎と思ひさるあふされ。這回の山津海津も其頭の非常備を爲
り。我よく間謀見と使へ敵も亦間謀見とて我虚実強弱を撈らるる
とまをを。然れが武を耀一戌を固く。且仁政を宗とし。地の利と人の和
据る大敵も亦怕る。不足らる然るをも。那河鯉の改木孝嗣及次因太
卿云とやらの。衛入水の多えり。他們的素藤伏誅の時大江親兵衛の
従ふ。軍功ありと誇るの。左右川の厄あり。見らるるも。さるは歎不
便ふ。ととる。小憶のを。嘆嘆あへ。道節莊介小文五郎の慰難。憫
然る。信乃毛野現八大角も未見の士卒を忘れぬ。言今他們不及ぬ
。現良將の仁慈博愛の君を。誰うあんと思へ。俱小敬服して。その

欽びと稟けり。憊而餘談も果一。照文の休暇二十日の勲勞と賜る。
七犬士と相伴。義実主と俱一。あつて。日暮春れて瀧田へ還りけり。あの日
議を傳ゆ。妙真音音也。單節の。親兵衛が安危代四郎の上左
らん右やと思ふ。心有敷系小慰難。只音耗を松の戸小葛丹葉を。秋
書て。其又楯月を。さる。けり。程は有司們の。人馬調煉の下知を。安房
四郡の村正と。莊客小徇。水陸共。準備あり。山。假屋を。構へ。且鹿
寨と。為り。又浦邊。漁舟と。取。楚國の。競渡。擬せ。こ
たり。安房の。春寒。冬。暖る。然。十月。小春。唱。暮春。春。優
。日。和。多。けれ。那。宋。人の。不。龜。の。茶。を。兵。安。の。徵。水。戰。を。差。次。
馬。を。囚。甘。海。を。渡。船。を。競。へ。て。先。を。争。ふ。士。卒。い。あ。小。聚。合。り。小
程。小。義。通。御。曹。司。の。杉。倉。武。者。助。直。元。田。税。戸。賀。九。郎。逸。時。苦。屋

八代傳九傳卷三十一 十五 文英堂藏



七犬士海
 邊の
 水戦を教
 煉む

八木傳七舟卷

十六

大英全史



八木傳七舟卷

大英全史

八郎景能等勇士都々十數名。雜兵五千餘名。皆共侶。從之。件の浦邊。小舟。七犬士も。俱不武器を。救入馬。小跨り。伴當を。領て。参する。その中。水戲。水馬。大阪。毛野。大塚。信乃。犬田。小文。五口。犬飼。現八特。小勝。ま。人の視。を。驚。く。ま。ま。と。い。ふ。と。る。又。大。山。道。節。犬。川。莊。小。亦。拙。り。ら。せ。獨。犬。村。大。角。下。野。中。成。長。り。一。六。水。戰。中。を。疎。り。し。と。ふ。の。時。勉。く。習。得。て。敏。く。其。技。を。能。し。け。り。既。お。り。十。月。も。二。十。日。あ。ま。り。ふ。る。り。時候。水。戰。の。調。煉。果。一。六。直。元。並。お。七。犬。士。等。へ。又。義。我。通。小。俱。一。ま。り。く。山野。小。造。り。て。獸。獵。を。義。成。隊。下。知。あ。ぬ。あ。り。昔。者。唐。山。る。湯。王。を。雀。羅。と。り。く。小。禽。を。捕。る。ふ。其。二。方。を。張。り。一。方。を。張。り。せ。入。る。者。へ。入。れ。逃。る。者。へ。逃。け。よ。と。い。ふ。と。是。仁。人。の。做。を。所。必。か。く。の。如。く。る。べ。し。然。今。番。の。獸。獵。は。是。軍。陣。の。習。学。る。べ。し。必。獲。と。會。り。く。善。益。の。殺。生。を。く。猛。獸。の。

工藤景光を或の
下河邊
行光小作
東鑑を
正一とせ

人を怕と偽逆來ぬを射々斃まとも逃るを趕々殺せり。但生物が第一。一。或。り。又。傷。る。も。殺。さ。る。を。其。亞。と。せ。ん。在。昔。建。久。四。年。五。月。二。十七日。鎌倉の右幕下。朝の畋獵。小工藤。莊司。景光。山鬼の大鹿。小。鹿。見。ま。り。と。射。け。る。祟。中。那。身。の。鼻。小。疫。死。け。り。練。是。を。思。ひ。か。ひ。ひ。と。言。町。寧。小。誠。め。の。ひ。く。七。犬。士。及。直。元。等。も。俱。不。感。服。一。て。昔。よ。違。り。せ。士。卒。並。不。列。卒。小。傳。へ。其。殺。伐。を。制。め。り。然。も。七。犬。士。の。射。る。所。百。發。百。中。る。ぬ。る。故。ら。る。猛。獸。の。只。其。四。足。を。射。々。滾。一。て。是。を。列。卒。小。生。拘。せ。然。も。あ。ぬ。毛。屬。の。或。り。其。尾。を。射。て。墮。し。其。耳。を。射。断。る。の。も。諸。獸。小。大。と。り。并。て。其。弓。勢。小。駭。怕。ま。り。走。り。ぬ。阿。容。々。々。と。して。生。拘。ら。る。ぬ。日。毎。小。數。十。頭。之。れ。が。直。元。逸。時。景。能。等。の。ゆ。え。士。卒。の。武。藝。あ。る。者。も。皆。七。犬。士。を。師。と。し。習。ふ。敢。殺。伐。を。上。旨。と。せ。ま。然。れ。ば。の。時。義。成。主。復。下。知。

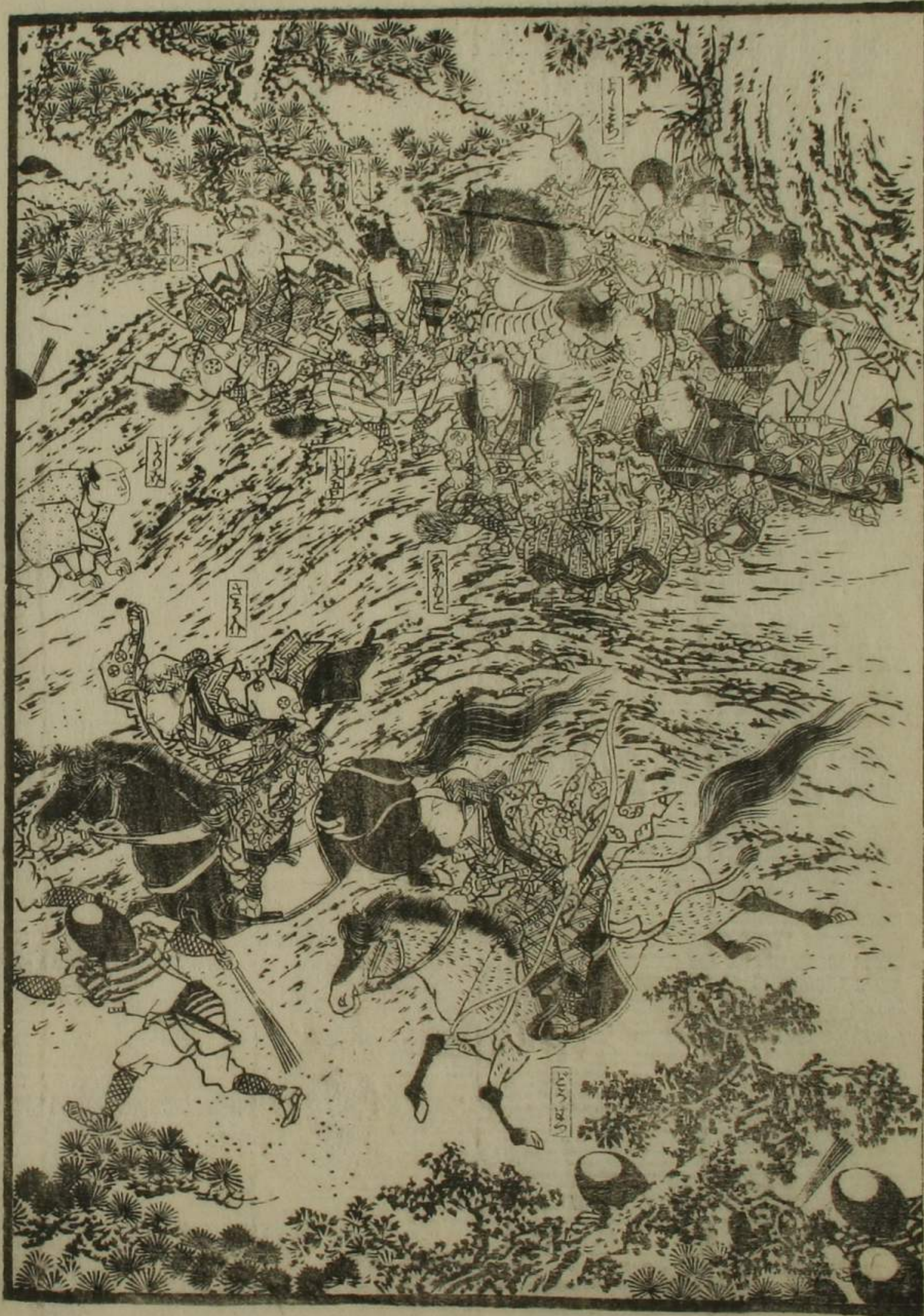


八十九傳九轉卷三十一

十六

○文安堂主裁

のやまの山
 の山を
 七犬士
 人馬を調
 練せし
 よりこの山
 回りのあり
 ありせし
 ありし



八十九傳九轉卷三十一

○文安堂主裁

あつ。人を害する豺狼。稻穀を鼠茶を猪鹿の飽まで喫せ。後小載て遠く
 嶋嶼へ流せと。一箇も殺しぬ。伊豆相摸の漁夫まで。這仁改を
 感。慕ぬ。左右を程。冬も既。十一月中旬。小承り。時候有
 一朝。瀧田の義実主の猛可。蚤崎照文を召て告。我親兵衛を憶
 ふ。故欣。昨宵殊る夢を見。啓言。大江親兵衛も。今番の獸獵の隊小
 在。他皇國の獲。射。敵死せ。引提。我小見。思
 思。忽馬と驚。覺け。夢の五臟の煩。佛經。世の果敢。占
 辟言。泡沫夢幻。遮莫。周禮。六夢の説。則。其官を置。占
 夢。其吉凶を知る。最故。然。上古。天朝。あ。の。宗
 神。天皇の即位。四十八年の春。正月。天皇。則。豊城命。と。活目尊。小勅詔
 奉。各其見。夢の縁。天日嗣の大位を定め。ひ。書紀。小見え。

その他夢小由。吉凶あり。國史及諸書。載られ。故。奉。小違。あ
 び。開。擬。ら。て。の。あ。ね。ど。只。虚。夢。と。の。ま。へ。く。虎。の。猛。悪。の。獸。人。の
 殘。忍。奸。虐。を。則。虎。狼。野。心。の。親。兵。衛。今。京。師。在。て。虎。狼。の
 等。一。は。奸。人。の。苦。一。ゆ。ら。く。も。あ。る。光。る。死。欣。あ。る。む。や。夢。寐。と。の。い。ど。も
 快。く。む。因。り。我。又。思。ふ。親。兵。衛。が。安。危。を。知。ん。と。同。謀。使。を。遣
 ち。後。暗。に。所。の。明。々。地。の。使。を。り。亦。復。調。員。を。献。り。室。町
 殿。小。請。宣。し。て。親。兵。衛。を。召。取。り。許。さ。る。と。思。へ。と。又。ヨ。ク
 資。財。を。費。す。あ。る。が。れ。の。所。為。る。が。我。口。親。安。房。殿。小。如。此。せ。よ
 と。の。い。さ。か。り。汝。先。稻。村。の。赴。き。家。老。毎。小。情。地。小。告。て。他。等。も。宜。か
 べ。と。い。つ。左。も。右。も。計。ひ。て。よ。亦。他。事。も。課。ま。れ。照。文。深。く。感。服。し。て。
 親。兵。衛。が。京。師。の。安。否。を。信。ま。で。御。心。小。掛。さ。せ。御。慈。孫。と。ま。ら。ま

ともの上やひ死。仰美りひひぬ。徑小稲村の参上り。宜く計ひらむ。答
稟し退た。いそぎ稲村の城に赴た。則辰相清澄の老館の御意
箇様々々と件の一義を告ぐ相譚ふ辰相も清澄も俱々感佩して異
議あらず。徳も敦に御賢慮を館の推辭とみえや。詔の稟上りて
隨即照文と共に召小義成主の身邊おまわり。件の義を告せられ義成
徐小听果。且感。且其欽ひ大く。則答のま。今美徳老館の
御賢慮の愚意も亦相同。鶴又京師へ使を遣して。請ぐ親兵衛を召
取ん歎とて大氏等小意見を伺ひ。毛野及自餘の六犬氏も皆只實の一
字を是として。別議をければ黙止せし。それより一々五十日あまり。歴ぬる今
ま。信るに必是故あるべし。然るに再度の使も。親兵衛を請稟れども。
性急とのみ。且陰のみの一義を陽の主に首なる。室町東

山の両公再度の調子を獻る。忠信の我真面目も。數千金も惜む。小
足も邊小唐山の故事と思ふ。般紂が境暴る。西伯文王。美里の囚
も美女と數千の宝貨と。償ゆる例あり。今戦世と云といへども。那紂王
が時子似む。聖皇賢相上在。管領の私議も亦仍れる。所あ。徳れ
這回も又五千金と齎して京師へ使をま。む。十一郎の能還りて。その美を
老館へ稟す。大士等の出。郊外に在り。然るを今召よ。告て再議の
及ぶ。もあむ。老館の御意忝ければ。他們も感服せし。んや。山獵果と
來ぬるを。告るとも。遅し。とい。就。又一議あり。今番の使も。別人ら
要る。十一郎の歸國の後。い。久。これ。最大義を思ふ。ければ。亦復那
地へ赴。事よく計り。親兵衛を相伴。來よ。か。と亦餘義も。君
命。照文の唯々と。額。徳。美。稟。仰。美。り。ひ。と。先。度。の。正

使つか親ま兵衛べゑ又また代よ四郎しろうのの帮ま助すけあり。ああどどりりとと臣しん等らもも亦また副ま使すけ失あるる。苛い子こ崎さのの賊ぞく難がた京きやう師しのの首くび尾びもも皆みな便べん宜ぎととゆゆいいひひ。今こん度どのの先せん度どのの弥や増ませせるる。特とにに大だい事じのの御おん使しささるる。短たん才さい淺せん慮りよのの身み單たん々たん。數す千せん金ごんとと齎しよのの船ふね。東あづま海うみ賊ぞくとと殺ころ攘じやうひひ陸りくのの京きやう家けのの禁こ錮ごをを解とけてて。親ま兵衛べゑををおおくく還かへはは。大だい任にんををよよくく仕つかううんんやや。千せん里りのの水みづ行ゆきをを幾いく十じゆ回かい往ゆき復かへ仕つかひひとと。丹にをを解とけてて。ああどどりりとと任にん重ぢゆうくくてて力ちから足たりぬぬをを知しららずず。仰おん付せひひままりりてて。失あわわぶぶ争い何なにののせんせん。賢けん慮りよをを仰おん付せひひままりりととおおそそるる。勸こ解げけけるるをを義ぎ成ぢやう成ぢやうのの點てん頭とうののいいくく誠まことのの其その誤ごもも謂いははれれ。其その副ま使すけのの何なに人ひとをを欲ほ得と遣つかははせせ。六む郎らう兵べい庫こ助すけのの思おもひひをを。ややとと向むかひひてて。兩りゆう個このの老らう每まいのの阿あとと心こころをを開ひらかかすす。中なのの清せい澄ぢやう一いつ霎じやく時とき沈しん吟いん。最さい愚ぐ按あんののいいへへとと。今こん番ばん又また照あ文ぶんのの仰おん付せひひままりり。京きやう使しのの副ま使すけのの田でん稅ぜい戶こ賀が丸まる。郎らう逸いつ時とき苦く屋や八はち郎らう景けい能ねいとと。ああどどりりととああどどりりとと。他た等らのの景けい義ぎのの素す藤ふじのの館くわん山さんの

城しろをを抜ぬきき。命いのちをを免まれれ逐しゆ電でんとと。浮う浪らう孤こ獨どくのの身みをを托たくささりり。大だい江え親ま兵衛べゑのの隊たい不ふ諫けん。素す藤ふじ伏ふく誅しゆのの日ひ軍ぐん功こうあり。ああどどりりとと召よ復ふくされれ。本ほん領りやう安あん堵とはは。只ただ是これ仁にんのの恩おん之これ義ぎ之これ是これ等らのの故ゆゑ也なり。親ま兵衛べゑのの安あん危き小こ就しゆてて。他た等ら骨ほねをを折お知ち智ち力りきをを盡つくすす。照あ文ぶんのの帮ま助すけ不ふ做しやうりり。俱く成ぢやう成ぢやうののいいひひ。賢けん慮りよ誰たれ何なにとと問とははれれ。義ぎ成ぢやう成ぢやう主しゆららちち領りやうはは。我われ他た等らののいいひひをを忘われれ。六む郎らうもも同どう意いをを然しか然しかとと。逸いつ時ときもも景けい能ねいもも武ぶ藝ぎ拙せつとと。且かつ思おも慮りよあり。親ま兵衛べゑのの及およびびとと。別べつ人ひとのの優まとと。ああり。相あ心しんくくとと。ああどどりりとと。照あ文ぶんもも又また稟りやうささ。副ま使すけ二に人ひとのの機き臨りんとと。愈い利りあり。仰おん付せひひままりり。願ねがひひ義ぎ成ぢやう成ぢやう主しゆ又また領りやうはは。定ま然しか然しか之これ孔子くわんしのの言ことをを。三さん人ひとのの行ゆきへへ。吾われ師し有あり。其そのよよしし者ものをを擇えらぶぶ。從したがふふ。俱く不ふ行ゆきならずず。那か逸いつ時とき景けい能ねいのの御おん不ふ直ぢやく元げんとと。俱く不ふ義ぎ通つう小こ從したがふふ。七しち犬けん氏しのの人ひと馬ば調てう煉れんのの獵りやく所ところ不ふ在あり。既すで久ひさしし。早はや

人を走りて召來して吩咐先這美をといそせぬ折々件の逸時景能の
 御曹司の御使を立てて獵所より参入りし。その時えありし義成主の時
 便宜を執ひぬると大なるを。隨即逸時景能と縁類へ召よき。使の所以を聞
 ぬ。是則別義ありし義通君。昨日獵所の山路より。料ら靈芝をぬぬけり。
 其靈芝の根ありし十茎あり。疑ひもたれ祥瑞され。憲覽ふ入れぬと云。兩個の
 使の美を舒く。靈芝を近習ふ。逸與と。義成のとも見ぬ。展相清澄
 等。宣ふ。靈芝の世稀なる。我是を憎む。あねど。約莫人の君る者。
 漫の祥瑞を執へ。奸民屢奇を呈す。利禄を欲する。至る。在昔唐
 山後漢の光武の中興の時。年毎の祥瑞の。皆退け。賞せむといへり。
 志ある君の誰も。徳をばげれ。思へ。義通が。孝養の一端。る。靈
 芝の十一郎の預けて。老館に見せ。なりて。御用る。是も亦調貢の一種。備

へ。又六郎兵庫助の件の一義を。戸賀九郎と八郎云渡して。逆旅の準備を
 いそぐ。獵所へ。別人を遣して。反命を致さ。まへ。の餘の所要の箇様々。と
 言。町寧。命。多。大家。俱。言。兼。して。打。連。立。を。退。り。け。徳。而。展。相。清。澄。の
 照文と俱。逸時と景能を。別席。小。退。り。今。番。又。登。崎。照。文。を。京。師。へ
 御使。遣。さ。る。小。退。り。逸。時。と。景。能。の。副。使。を。仰。付。ら。其。故。の。徳。と。大。江。親
 兵衛。を。償。ふ。死。事。の。趣。を。演。説。れ。逸。時。景。能。兼。り。相。執。ひ。て。京。師。を。臣。等。の
 景。義。の。大。江。親。兵衛。の。好。意。不。馬。り。會。社。首。の。恥。を。雪。む。とい。へ。徳。の。附。驥。の
 小。功。の。思。ひ。け。さ。り。徳。の。一。大。事。の。副。使。を。奉。り。ひ。一。期。の。面。目。の。上。や
 以。死。縦。去。向。小。難。義。あり。し。命。を。涯。り。仕。ま。る。ん。相。あ。ら。ぬ。い。と。異。口。同。様。の
 言。兼。して。馳。宿。所。へ。退。り。け。り。の。故。展。相。清。澄。の。則。兩。個。の。青。待。を。逸
 時。景。能。の。代。と。して。猛。可。の。獵。所。へ。遣。し。隨。即。這。二。人。を。り。直。元。と。七。犬。士。等。も

事の趣を告知して義通君へ儀のどく反命を果させけり。介程の靈崎照文の件の
 靈芝を伴當持して瀧田へ入り参り隨即義実主を見参りて御本意の如く京
 へ遣さる御使を照文又奉りて逆時景能等と俱水路を那地へ赴くべしとある
 館の仰及御答の箇様々々又その靈芝の御曹司の獵所の山路を得させぬ
 其の美の亦箇様々々と都々那立意を告まわらせし靈芝を見せしむる義
 実主の歎びのうもあらむ先其靈芝を見玉宗実主は一根本にして十莖ありその
 第四莖と五莖と第十莖の短くて凋然とく其色異之故也哉百十數年の
 後の世は這祥瑞のゆも僅小徳少者偶然なるを悟るもあつて天機の量
 知るべくもなれ這時誰か思ひぬん義実主の奇この稱く惜る心なくとも依照
 文不返一ぬけり然又姉真音音曳も單節の親兵衛代四郎の安危浅
 のと思ひ不嫁の存けし老館の御慈愛ふより又照文逆時景能等が京師

へ使を奉り親兵衛を償取せぬ館の仰儀々と傳へ歩知り相賀びて左も右
 中も兩館の御恩とて俯て思ひ仰せられた鹿野山の樹根巔も數るる七浦の
 澳もあらんと傳稱く照文の宿所もたて主人の妻もたつ日と女の来る日と向
 遙けた水路の行を勞ひく且慰めけり介程の有司等の京師へ調貢の下知りて
 夜となく日となく急ぐく僅小三四日ありて東西成整ひり其件々の黄金五千兩
 名刀五口柘弓二十張征箭五百幹鐵砲二十挺並塩鷹五拾雙乾鯛五
 拾櫃綿五百屯麻五百把是れの日照文逆時景能の召れて君侯見参る
 義成則仰る旨あり其第一條の今番朝廷撰家並室町東山殿へ進
 る貢物の八犬士の姓氏勅許の朝恩も答奉るを爲す且大江親兵衛歸
 東の暇も賜らんと願ひ稟せべしあれも機臨と変ふ心なる損益用捨ある
 べけれ胡意貢進の諸目錄と呈書に相渡さる因て右筆大岸法六郎を

十一郎等不従。俱小京師遣。上書啓狀の諸文書。其地不届
る日先。時宜を胡以機。落之。書て其を奉るべし。素紙。只花押
墨印を拓た。と。幾枚。照文。不與。る。あ。辰相清。澄相傳。へ。首途。見参
礼儀。の。果。し。照文。逸時。景能。俱。退。有。司。黄金。種。の。買物。私
用の。米錢。不。至。る。ま。漸。く。受。合。る。港。口。の。船。積。入。れ。ん。と。這。使。不。相。従。ふ
右。筆。大。岸。法。六。郎。並。不。野。兵。十。名。走。卒。奴。隸。二。十。餘。名。支。役。六。十。名。都。て。の
一。百。名。不。近。海。へ。悠。而。其。通。宵。東。西。咸。許。多。馬。小。駝。し。て。終。日。洲。崎。の。港
口。へ。出。渡。海。の。船。載。る。程。不。這。之。使。の。所。親。聚。い。ま。見。送。る。の。少。く。六
登。時。照。文。逸。時。景。能。等。人。々。不。告。別。主。僕。其。曉。天。不。齊。一。船。不。乘。る
程。折。し。順。風。は。航。工。們。の。纜。を。解。け。帆。を。揚。西。を。投。て。走。走。せ。け。る。
あ。の。日。十。一。月。中。氣。の。る。り。不。是。上。り。僅。く。三。四。日。を。歷。て。稻。村。の。城。内。に。隊。より

武藏相模の方遣。て敵地の動靜を撈らる。間諜見。西。名。か。り。来。一
大事あり。と。汪進。是。不。上。り。義。成。主。其。兵。毎。を。庭。門。より。縁。頼。の。下。召。よ。せ。て
み。づ。く。その。美。を。あ。る。腹。心。股。肱。の。近。臣。五。六。名。左。右。不。侍。り。兩。家。老。辰。相。清
澄。等。其。次。の。間。伺。候。者。俱。不。其。告。を。う。ち。穿。く。不。是。則。別。義。我。不。あ。る。官
領。扇。谷。定。正。主。の。道。節。信。乃。毛。野。名。の。八。犬。士。を。酷。く。憎。る。り。あ。り。て。其。怨。不
堪。ざ。り。けん。武。藏。相。模。下。總。上。野。越。後。五。箇。國。の。大。軍。を。り。當。家。見。を。伐。ん
と。譏。ま。る。云。是。則。一。朝。の。所。以。る。も。事情。を。原。る。不。是。長。不。定。正。の。家。臣。根。角
谷。中。二。の。政。木。孤。魅。さ。れて。非。罪。の。罪。人。河。鯉。孝。嗣。を。阿。容。々。々。と。瀝。與。考。し
時。穴。栗。專。作。等。と。俱。不。虚。氣。一。隨。不。の。も。醒。ね。航。々。五。十。子。の。城。不。赴。は。く
那。大。刀。自。の。事。の。顛。末。を。箇。様。々。々。と。訴。く。定。正。听。く。訝。り。ま。る。り。ち。も。閣
を。召。す。ね。隨。即。箕。田。取。蘭。二。不。士。卒。幾。名。を。従。い。せ。く。服。大。刀。自。と。迎。へ

よこそ前圖遣はるる谷中二門皆徒らなる虚言である。死すべしと云はれぬ。馭蘭二
 門の徒ら五十子の城へかゝる事、徒らと告ぐる定正勃然として怒り、堪へず。原来谷
 中二門作事、情地の利もよき。罪人何鯉考嗣と脱する。中二門をいふ。開を
 以て瞞れ、為す。風と捕へ影と抱く。大刀自の事を訴へ、君と欺く。罪輕く、罪
 身へは、相従ふる。走卒奴隸に至る。緊き牢獄、困窮龍て。谷中二門、招き、
 よと。敦圍屋茶く下知れば、馭蘭二門を奉り、則谷中二門作事と結、極と緊
 ち。拷問も時、谷中二門作事、其餘の親兵も、提れ、意の覺る如く、思へ、天刀自の
 事、不思議といふ。餘り、狐狸の所為なり。故と思難る。開が中二門、苦い
 る。聲戦か、陳言なり。其田主、言を止む。稟を、美あは、所、那大刀自の
 事、何で、偽を、稟を、死然れども、主僕、銷や、失せ、往方、知、事、小、就
 ち、なく、思、惟、れ、倘、是、孝、嗣、親、友、の、狐、を、使、者、あ、は、教、然、る、ま、ち、幻、術、を

仍ふ若く我毎を魅らる。孝嗣を掠奪る。走らる。事、あ、ら、ん、ま、い、む。あ、ら、ん、ま、い、む。
 我、れ、く、罪、饒、ま、る、べ、い、あ、ら、ん、ま、い、む。願、六、權、且、頭、顱、と、假、し、て、放、免、兒、小、做、ら、ん、ま、い、む。
 作、並、小、親、兵、等、と、俱、小、樹、を、伐、り、草、を、其、拂、へ、ま、い、む。佐、と、孝、嗣、の、往、方、を、索、し、ま、い、む。
 摘、捕、し、呈、ら、ん、其、事、倘、果、し、ぬ、む、い、の、折、頭、顱、を、召、さ、る、ま、い、む。御、賞、罰、の、違、は、
 わ、ら、ぬ、い、の、議、を、す、え、あ、ら、ん、ま、い、む。愚、意、を、遂、さ、し、ま、い、む。と、叫、べ、專、作、親、兵、等、も、異、
 口、同、音、也、を、陳、し、け、馭、蘭、二、門、を、う、ち、す、ま、い、む。あ、の、日、の、口、を、止、め、牢、舎、遣、り、て、却、次、の
 日、お、至、り、ま、い、む。主、君、定、正、谷、中、二、門、が、情、願、箇、様、々、と、件、の、一、美、を、す、え、上、方、定、正
 頭、を、傾、け、て、其、美、定、正、あ、ら、ん、ま、い、む。然、れ、も、事、小、假、托、し、逃、亡、し、死、後、料、り、か、ら、ん、ま、い、む。權
 且、谷、中、二、門、作、事、を、放、免、兒、小、做、ま、い、む。他、等、果、し、て、願、の、如、く、よ、其、事、を、做、
 卒、る、ま、い、む。宅、眷、を、那、身、の、代、と、し、緊、し、く、牢、舎、小、敷、か、し、開、が、中、小、親、兵、奴、隸、の
 單、身、中、妻、も、る、子、も、る、者、の、開、が、男、女、の、胞、弟、兄、弟、小、父、小、母、を、林、獄、せ、し、事

忽諸小走くべと沁る貌して命ぎれ。馭蘭二美が退治儀のごとく執行ひく。
却谷中二と専作と隊の兵毎の禁獄を饒して御説徳々とのひ知せ且限は小
百日をのり。孝嗣を搦捕るまおし。倘その功る時其身はら宅眷を
連坐の罪免るべく。勉より。と言示し。皆其縛の索を解允して放免
見あをあらけ。是より。谷中二専作の同罪を走卒奴隷を分ち従へ。日
毎小出く。退途とる。孝嗣の在処を索る。毫も便宜をひき左右を
程小夏へ過く。秋も又八月の時候より。谷中二の孝嗣を緝捕の限り百
日小垂とる。小夏へ過く。馭蘭二就く。稟を義あり。又百日の日延を願ふ。馭蘭
二と役柄るべ。谷中二を惨刻もあら。生平同氣相求め。俱小孝嗣を
諳らたる小人をい。王君の執成稟より。又百日の用捨あり。今茲の冬
十二月を限り。功を奏せ。と分付は。是より。谷中二専作の二隊は。限り

兵を領く。或ハ貌を窺一各と。更して武藏相摸伊豆信濃上野下野常陸下
總ま。約三四十里四方へ漏を限る。孝嗣並那幻術とよまる者や。あそ
悄悄地小穿。既小。十月の晝を照驗と。俱小五十子の
城小。又近郊を求。程小十一月の初旬小。料ら。黒田河の邊
や。那餘類一人を搦捕り。其故什麼と。母る。武藏野の程遠く。那
穂北。落點餘之七有種。今茲の夏四五月の時候。八犬士別れ。後も。義
父氷垣。殘三夏。幼の重病小。拘り。妻の重戸共。侶小。一日も暇る。け。春
病の幼。芳。その。九月中旬。某の日。小夏。移。身故り。け。重戸。衣。悼。い。ど
ゆ。安。基。の。事。七。七。の。追。薦。小。又。幾。許。の。日。を。過。し。又。冬。十月。晦。日。中。陰。精。果
あ。六。六。の。日。有。種。の。重。戸。小。向。ひ。く。晝。暮。八。犬。士。の。徴。れ。安。房。へ。赴。け。し。親。の。看
病。小。暇。あ。り。ま。す。一。日。も。安。否。と。問。ひ。且。故。翁。の。病。臥。の。時。里。見。殿。と。り。人

葛を賜り義を授けられ安房使を遣りて八犬氏の一人の翁の死去を告ぐ。
 と思ふに何と商量もする小重戸の敢異議をなす。
 其次の日朝日八犬士並ぶ、大照文筆小重戸の消息二三通を書き寫り且此の
 人情を準備する老僕世智小オニの使を分付く。其十二月三日の朝のそ
 が立ち出づ遣りけり。這世智小オニの異義大角現八の事あり。八犬士
 相識られ且心利する者れば有種ある使を課する。胡意二人を用せしむ。
 他見を憚る書翰も他路ゆく。不慮の急病ありとも一人の先へい免
 為老徳の心を用ひし然る世智小オニ俱に逆旅の準備をなす。其朝早天
 下穂北の宿所を立出づ。墨田河原まで来りける程小オニ猛可小腹痛と。
 堪りて走りぬる。小オニの地方の賣津船公。蟻谷利八と喚做さ
 者ハ世智小オニ父なるれハ權且丹里小立寓。將息して瘵も亦復路をいそ

ごとく俱小梨八許赴けり。事由告ぐ主人の老波あるゆゑ先小オニを懇小
 勤り地炕の邊小臥しめ。丸茶を薦め湯を與る。程小オニ下痢水
 瀉して圍合へ暢ふと云く。昨宵首途の飲ばぬ朋輩酒を沽せられ
 去折喫過したる。出るんと云左右して小オニの腹痛水瀉の愈へ。冬の日
 早く散れ下晡かき。時主人梨八を賣津上よりかへ來り老波と共侶。
 この二客を抑慰め。今より西とも二里あり過せ。今宵の枉。這果曉して
 明日風出くゆめと。老波の酒菜を買ひて來り梨八を酒と湯並て俱に世智
 小オニ小オニ薦めけり。然れども小オニ病後なれば。多く飲めば利八世智
 小オニ叔侄の送る嗜む狂水るれ。献酬れつ喫程小梨八も世智小オニが安房へ
 使小立られと。少くその所要を問ふ。世智小オニ醉ふ乘して八犬士の上を告ぐ。
 道節信乃を首め。孰も勝り劣る。武勇力藝箇様々。と聲喋々



八犬傳九輯卷之上

六

○文叟堂藏



まのあしきも
あつらふも
みよとる足と
も場たのむ
わむ著作堂

八犬傳九輯卷之上

○文叟堂藏

と死ねて 小才二傷痛くて 只顧小目と注せ又其袂を掖るごとく 悄地小言
あく説誇る 世智介の尚曉得らる 諄復らる 暗りけり 後ろ一程小根角谷中二
辯を制れども 穴栗專作の日の 孝嗣の在処を 啗知る 便り欲得とて 同罪放免の 野兵十五
六名と従へ 終日遐途を 徘徊多し 其 嚙息 昏小心とも 主僕利八の 門邊成
過る程 折りて 家内 世智介 八犬士の 姓名を 倡ぐ 武勇を 説誇る 聲 耳高や
く 啗えり 谷中二の 誅り 俱小外面 穴 綱聞 あり 其の 只と 知ま 欲ま 是
則 犬山道節 犬塚信乃 們小由縁 あり 者 多し 一と 猜り ゆる 谷中二の 合 咲わ
が 肚裏 思ふ 那奴 們小我 素 河鯉 孝嗣の 支黨 多し とも 那 犬山道節 犬
塚 信乃 犬 阪毛 野 們 義 小我 君 小 冠 して 五十子 の 城を 火 攻 あり 結 城 煉 馬 の 殘
黨 今 那 奴 多し 捕 捕 多し 敵 死 して 其 在 処 を 知 ると 死 必 是 我 們 小 罪 を 償 ふ 只 是
ぬべし と思 小 心 を 野 兵 あり 其 示 して 兩 隊 小 ころ 専 作 小 背 門 小 方 谷 中 二 門

邊より一度ふとと稠入る耳を串く聲奇高くやれ 艦 艦 見正可 啗 け 扇 谷 殿の
脚 誑 を 烹 て 惡 犬 士 の 支 黨 を 緝 捕 の 頭 人 根 角 谷 中 二 元 栗 專 作 あり 在 小 索 小
被 れ と 喚 び 敬 馬 に 怕 る 世 智 介 利 八 老 婆 多し 共 侶 小 跪 時 酒 醒 て 俱 小 云 云 と 陳
ま れ ども 谷 中 二 多し 分 説 を 听 くと 野 兵 小 下 知 して 轉 々 と 主 客 二 名 と 結 紐 せ け け け
が 中 小 才 二 心 早 知 者 多し 緝 捕 氏 の ち 入 り 一 と 小 綱 方 小 身 を 倚 ぐ 壁 小
落 ち 處 あり 衝 と 推 破 ち 虎 間 小 脱 れ 出 づ 穂 北 を 投 げ 飛 ぐ 似 小 逃 亡 せ 一 と 谷 中
二 專 作 野 兵 多し 事 小 紛 れて 知 ざ ざ け け 後 而 谷 中 二 野 兵 小 下 知 して 世 智 介
と 利 八 十 多し 屢 屢 中 二 せ け 只 那 道 節 信 乃 等 の 在 処 を 根 穿 ち 垂 示 欲 得 と 責
問 小 利 八 丈 婦 八 犬 士 を 小 知 ね ば 小 ち 又 世 智 介 小 左 右 と 頼 陳 小
た け れ ども 谷 中 二 敢 実 と せ せ 兩 箇 の 約 裏 あり 見 出 して 野 兵 小 披 け 檢 査 小
果 して 小 内 小 落 鮎 餘 之 七 有 種 八 犬 士 小 贈 書 翰 あり 且 其 書 中 小 河 鯉 佐

太郎の政樹又政木 大全孝嗣右大 屋次園太卿云と共 結城の左右川水の事と悼 悼むり 見え 又里見の家臣蛭崎 十一郎照文と、 大法師寄 一通の謝書も ありけれ 谷中二專作 們が 歡び 則ち 書翰も 通を 照據と して苛 鋭く 世智介と 拷問せ 世智介遂 不脱る 路あり 有種の 素生と 首を 道節信乃の 八犬士に 累累 小久く 落船の 家の 寓居して 復讐言 の事あり 後里見殿 小徵れて 皆共侶小安房 へ赴か 又河鯉の 政木全 孝嗣の 曩の 死刑及び 折大 江親兵衛 小進近 して其 帮助と 則ち 伴れて 上總小 親兵衛 小伴れて 次園太 卿と 吸做 浮浪人 と俱 小結城へ 赴路 程左 右川 橋を 憶り 敵の 鉄砲小 數を 墮されて 死活を 知ぎ 云と 云と 豫定 那噂 招り 又の 事小 可の 老僕小 才三 喚做 者と 俱小 安房使 小立れ 小の邊中 小才不 腹病發 路去 小可の

八犬傳九集卷三十一

小父の 許立 下り 將息の 為小 日と 鎖せ の然 那犬 士の 孝嗣と 小父の 許立 下り 將息の 為小 日と 鎖せ の然 那犬 士の 孝嗣と 原來其 小才二 叔も 皆一 網捕 之り 小知ぎ 走り 其叔 德北逃 告有 種逃 亡疾 推鬼 搦捕 之先 世智介 德北光 景尋 向世 智介 答然 以一 邑約 二百餘 電お 比皆 豊嶋の 殘堂庄 容武 藝を 嗜有 種の 小屬る 一晝 大山 道節の 復讐言 帮助る 本事 知召 之谷 中二 躡踏 現あ 今這 小勢と 推寄 之効 一圓 五十子 へ立上 是是 事の 趣を 上と 御下知 依を 專作 諾ら 然八 野兵四 五名 留在 地方 之長 を召 其家 と守 之居 人々の 受を 宣示 谷中 二と 俱小 十個 許の 野兵世 智介 と梨 八丈 婦を 牽立 之蕉 火小 路を 照して 五十子 之城 を投 有任 程小 才の

ト。よひ。ま。不き。こ。二六の甲夜の間に徳北へから来て。則東人有種夫婦中途の禍事箇様々々。世
智介の小父梨八の宿所。扇谷家の緝捕の頭人根角谷中二穴栗專作と喚
做す。一隊約十七八名の猛者の為小柄捕られぬ。故に箇様々々と徳向黒田
河の邊まで。小才二が腹の病着發り。故に世智介の小父梨八許立す。權且將
息ある程に世智介の管待酒の酔不乗せ。口の外。八犬士のあまでも。説話のそ其
聲洩れ。那禍鬼不遇。と云其事の既略と喘々告知。されば有種つらうち。聴て
重戸を石より。公中。曩の犬山主の復讐言の後。那討隊の寄や来ぬ。と。犬士の毎故
翁と俱不敵と待。か。も。事洩されば。女。今。今番救ふ。八犬士の安否と訪。欲
去。我使休より。事發覺れて。苗害立地。ふ。及。是。則。天。命。討隊向。矢
種。の。津。防。戦。免。れ。家。火。を。放。て。腹。を。研。今。怖。と。備。重。戸。
推。林。不。ゆ。休。思。欲。も。勇。士。の。本。性。理。不。信。れ。も。死。易。く。生。難。く。憶。不。其。

根角谷中二とやら。一隊僅十七八名。今宵推寄せ来。彼他等。必五十子
へ。還。り。身。勢。を。從。へ。出。更。と。來。る。朝。開。不。る。衆。豫。知。せ。如。下。總。後。嶋
山。院。住。持。の。法。印。の。奴。家。が。先。妣。の。弟。也。出。家。不。似。け。る。義。侠。也。と。豫。言。す。據
り。且。境。内。の。廣。一。と。い。は。這。里。人。を。送。も。く。伴。い。初。の。漸。と。必。や。舍。藏。れ。ん。權。且
那。里。時。を。俟。て。恥。を。雪。る。便。直。も。ゆ。ん。喘。り。と。戦。歿。也。と。勇。士。の。譽。言。不。做。ら。ん。
と。詞。雄。々。と。諫。言。有。種。沈。吟。下。頭。を。拾。け。領。に。然。い。る。其。理。あり。今。我。躬
方。一。百。餘。名。敵。の。二。倍。五。倍。せ。ん。寡。を。の。く。衆。勝。と。も。躬。方。不。戰。歿。わ。ら。ん。と。冬
殺。し。て。名。を。成。せ。と。仁。人。義。士。の。為。る。所。現。立。退。く。ふ。あ。る。べ。し。因。て。憶。ふ。今。我。里。人。と。共
侶。不。徑。不。安。房。へ。赴。て。八。犬。士。不。憑。と。見。殿。不。仕。人。の。易。く。易。く。候。べ。し。と。大。敵。寄
ま。り。と。知。り。な。ら。ず。戦。む。と。退。は。る。恥。を。思。ふ。阿。容。々。と。今。中。安。房。へ。入。れ。ん。一。圓。下
總。へ。退。は。る。後。亦。主。張。せ。ん。と。小。才。二。暗。號。の。見。と。吹。鳴。し。て。里。人。等。を。疾。集。合。を

やと小才二あるゆゑ柱吊る法螺撥合て走り出り吹立々々事の火急を御
知され徳北一御の莊客百十數名多く竹槍連枷を引提く時を程に走
り多つ比皆有種が書院の廣庭へ其茶石の像く來會へ有種縁頼ふ立出那凶
變を告知せ且敵の英氣と避ん與一圓躬方の衆人を伴て下總を其の山院
いるんと思ふ事情を詞急迫しく説示せ大家皆立ち起馬を并中里の故老兩
三名詞ひしく答るや故東人氷垣翁の時より我門皆御庇て各宅眷と養
ふ今日お至れるお憐る時誰も異議せん死生とも生るとも東人の隨意多し
背にあらんやといへ大家異口同様に別議る一とを答ける有種是をうち空
各各早く宿所不走りかへる要用の家伏財宝と或馬不駝に或初不掛く皆共
侶今宵の中千住河原へ去る那河岸に我が船の大平駝三艘ありそれ
足るおわね他の船不載りとも便直と以る船の價を船主取らまはし或ハ又

馬あつた駝して歩ゆよりおももようきん夜も明が五十子より討隊の大勢推寄
せまべ脱落をせとといそつて準備の金二百兩あまの件之故老も不遞與
あつた大家孰も感せざる死相あらゆゆと心も果て共侶自身を起し外不
宿所を投て走りける登時亦有種小才二と家の農人の心利を迅行する四五名
急召上せおせ若門の今より家伏を河原へ運出と我も船不載り河の
邊不遠見して五十子まれ刃心圖の城の士卒まれ討隊の大勢來ゆと見れば早
不きこすクへさといへていひはさすれ討隊の大勢來ゆと見れば早
種北へ走り還りる里の家毎不火を放て烟不紛れ立去りて歩ゆより我投下總
那山院へ尋ぐ來よ術後れて敵の爲の辱おせられて後悔する勉めかと敬言せ
下總までの路費を取せも配早く定りし是より家伏をとりぬ重戸が指揮不
従ゆる一家兒の奴婢をど虚う者る一霎時の程馬不駝に或長韓權不藏
ゆ或越不裏と初不掛て千住河原遣り坐索約莫二時有餘不しと要用の什物

皆大平駄の多船三艘不載けり。今程は這穂北の莊客も各宅着と共家伏せ
 出ゝ来て船不載るとも。特小夜長は時候る。當時の河邊の曠々る郊原を
 業最立たる枯草ののこ人煙猶遠ければ是を知る者もけり。既して一村落の里
 人も東西成出果し流に従ふ者も皆高を操り歩も行く者も馬を牽て有種重
 とぬ婢と俱下總を投てを死けり。并が中お小才二有種の家の農人四五名の河の前
 面立明ら敵の討隊の寄せ來身と今飲くと候程も夜に皎々と明けり。話
 分兩頭當晚根角谷中二栗栗專作の夥兵不世智介と梨八夫婦と牽せ路
 次とい死かども程近うなむ丑三刻時候は五十子の城かか來り。馳々箕田取蘭二の
 宿所不覺慌忙と敵は喚覺して則取蘭二那有種が二通の書翰と書七
 事の既末略と告ていさ。御高不在下等。八里空田河の邊を賣津船公蟻屋梨八が宿
 所也。穂北の御士落點餘之七有種と喚做を者の老僕世智介並梨八夫婦

擲捕ける小より河鯉孝嗣が往方も又那大山道節大塚信乃大阪も野々八個の
 悪黨の在処も事詳不知れ。然當夏前面圖の法場也。河鯉孝嗣と掠畧
 亦幻術見八元自道即ち伏家の悪少年大江親兵衛と喚做を者云世智介
 が招す小より在処を敵い小皆是仕へ里見小在。獨孝嗣が存亡詳るねと他の
 水馬水技ととも濡れ入水もとも濡れせ。那親兵衛と共侶小仕て安房在ら
 飲是も亦知るべから。却那落點有種の道節信乃等と相資てあの春當城小乱妨
 ちけ。逆賊の一人也。下の五人一百餘名と俱小穂北の莊小在。皆是豊嶋信盛の殘
 黨也。其の先鋒して知り。徑小穂北へ打向て擲捕まと思ひかども我統る隊兵を
 り。一百有餘の強敵を樹んと易うらね。憚る心と推鎮せ。いそ死かかひぬ。いそ
 是等の趣を言上あ。一期の幸ひ御執成をねたまつ。いそくと卑下慢心鼻鼻
 めて説誇れ。取蘭二所々其書を閲して且今宵の拵を善言ると大々る。

猛不獄吏を召よむ。世智介と利八夫婦と牢獄へ遣へる。程不埒の鶏の
 數鳴く。朝霜白く天へ明け。徳而箕田取蘭二の早天より出仕して則主君定
 正有種が書を呈上して根角谷中二穴栗專作們が大功の事の顛末を
 つる隨ふ漏まを多く生拘世智介梨八夫婦の及道節信乃等の八犬士の在る
 且河鯉孝嗣の事又落點有種の事首の尾を谷中二專作們が朝の
 趣を言詳ふ告り定正歡び氣色小見を。則取蘭二命を。根角谷
 中二穴栗專作們の考嗣を捕ゆをいへも其往方を穿鑿鑿然且逆
 賊道即信乃毛野の支黨なる徳北の御士落點有種が老僕世智介並
 世智介が小父蟻屋梨八夫婦を昨宵墨田河の真邊に擲捕り呈上す。
 其功莫大なるを。他第一隊の舊罪を皆悉赦免せん職祿故の如く
 下就く他第が代として禁獄ある宅眷親族も饒一公七宿所へ還しね。そ

よりの猶急ぐ。兎の逆徒有種を討隊の一を今日徳北へ緝捕使し。取蘭二
 汝と谷中二を両頭人とて。穴栗專作を軍監とせん。選兵三百名を従へ早く
 徳北へ打向し一人も漏まを擲捕りぬ。時後れ逃れ亡るんとくせん。といそがを取
 蘭二の首を召退りて有司と相共ふ谷中二專作們を召よむ。舊罪赦免の
 恩命と有種を討隊の頭人へ命とある君命を云渡す。谷中二專作隊の兵
 迨天へも升る心地し。肩を尖り腕を張り俱し專作が宿所集合して先
 武器を悉敷正へける。介程不其田取蘭二の猛可ふ士百名を召聚へ人
 ちち飽まを戦飯を喫せ馬のヨミく豆草を飼く。谷中二專作等と俱し
 是を領く。五十子の城を出し辰牌の初刻をへ。連り路次をたどりども
 五十子より徳北まで阪東路二十四里一里の程を既し己の五刻ありし時
 稍千住河を渡り程不忽地徳北の方を下り。黒烟天を沖り猛火煽々

と燃升るを馭蘭二山谷中二專作等と俱前百遙小瞻仰く。原来逆徒の
 自焼して逃亡るをあらんぎむ。捕る漏しを兵母と喚りし馬小拍れく。葛島直の
 走らる。穂北の莊小末を見れば一聚落の白屋幾ともなく。皆火の被る限の
 わらね。輒く入らぬ。半介焼落く。後小士卒を找く。俱小打入て檢まる。自
 自焼の屍骸一箇もあらず。只近村の莊客等が火を滅せんとて。遺途より走
 て聚ひを馭蘭二谷中二号六有種が支黨をんとて。或は斫伏せ。或は矢場
 索と被る者二三十名あり。餘り怕れて逃去りけり。其の率や定正里見を怨とて
 竟小水陸兩路の大軍を起す。是其事の張本欽分教あり。蠻觸戰場具
 魏似蝸牛角上誰祈風。乱れ蘆へ治れる江のなる。角中も渡せ。兩國の
 橋よの詩詞の意を知らず。欲せば下回より次々き。解分るを聴ねか。

南總里見八代傳第九輯卷之三十一終

